開学50周年 特別寄稿

草創期金沢美大美術科の人々

木 村 弘 道

昭和20年８月15日、わが国がポツダム宣言を受諾し、連合軍に無条件降伏した。ここに約４年間にわたった太平洋戦争は終った。戦災を免れた金沢市では、終戦の日の８月15日に、金沢在住の若い美術家が集まって、敗戦で虚脱した市民を昂揚させるために美術運動が必要だということで、美術館の設立、美術工芸展覧会の開催、美術学校の設立等の構想が練られた。

やがて、文化国家を目差してわが国を再建すべしということが叫ばれるようになり、彼等が計画した美術運動は着々と進行し、昭和20年10月、戦後初の美術展覧会である北國毎日新聞社主催「第１回現代美術展」が金沢で開催された。

次いで、金沢市立の美術専門学校設立を目差して努力することになった。昭和21年２月金沢市は具体的に設置の準備に入り、金沢市議会においても金沢市立美術専門学校設立の件が承認され、６月10日文部省へ設立認可申請書を提出、7月13日「工芸」の２字を挿入し金沢美術工芸専門学校と校名変更のうえ認可された。予科１年、本科３年、設置科は美術科に日本画専攻約15名、洋画専攻約20名、彫刻専攻約10名、それに陶磁科約30名、漆工科約30名、金工科約15名。この外に研究生及び選科生を置くことができるという内容で発足することになり、一期生（予科生）の生徒募集が行われた。

７月25日願書の受付が開始され、８月13日締切り、同月17、18、19日と３日間、石川県立金沢第二中学校で入学試験を行った。受験者数は８名が欠席し、177名であった。８月21日に定員120名のところ、補欠も含み129名（うち女子10名）が合格者として発表され、10月５日午前10時から入学式が行われた。開校式は入学式より少し遅れて11月７日に挙行され、ここに金沢美術工芸専門学校は、金沢市民の全幅の支持と全石川県民の大きな希望を擔っていよいよ船出することになった。

初代の校長には、はじめ高村豊周が候補に上ったが、彼は「美術界再建の時期に、中央を離れることはどうしてもできない」と校長就任を固辞し、代わりに先輩の東京美術学校教授（西洋美術史）で美術評論でも活躍していた森田亀之助を推薦した。他にも一、二候補者の名がでたが、結局、高村豊周が推薦した森田亀之助が初代校長に就任することになった。空襲で家が焼かれたのと、高村豊周の熱心な校長就任の要請により来沢を決心したのであろう。昭和21年10月31日校長事務取扱、同年12月11日校長に発令された。森田亀之助は11月７日の開校式で新任の挨拶をかねて式辞の中で「四十余年の中央美術界生活の体験と智識を本校発展のために捧げん」と誓い、以後、金沢美術工芸短期大学長、金沢美術工芸大学長を歴任し、本学発展の基礎を築いた。

入学式と開校式を済ませ、いよいよ学校として本格的に授業に入った金沢美術工芸専門学校の教員には、昭和21年本学設置当初は森田亀之助校長を中心に、日本画専攻は畠山錦成と山本乙枝の２名であったが、昭和22年には野田道三（九浦）、原田太一（太乙、太致、太乙荘）、下村正一が就任した。

油画（洋画）専攻は、昭和21年に遠田運雄、宮本三郎、同22年に高光一也、同23年に竹沢基、同25年に小絲源太郎が就任した。

彫刻（彫塑）専攻は、昭和21年に矩幸成、畝村直久、長谷川八十吉（八十）、同23年に山崎三雄、同24年に山本力吉、同26年に松田尚之が就任した。

次に本学開学当初に在職した、森田学長をはじめ、美術科で思い出に残る数人の業績を紹介したい。

〔学長〕

「森田亀之助」は履歴書によれば明治16年に東京で生まれ、明治39年東京美術学校西洋画科本科に在学中、岩村透教授に就(ママ)いて特別に英語を修める他、私立国民英学会夜学会話専修科（卒業）、セント・アンドレウス夜学学校（退学）にて英学を修め、卒業後は英語授業担任として東京美術学校助手に就任した。同時に岩村透教授に勧められ西洋美術史を専攻することになった。この間も暁星学校佛語夜学部に通い(卒業)、フランス語を修めた。明治42年10月1日より大正3年まで『美術新報』の編輯参与となり、同誌の毎号に海外の美術界の動向や美術家評伝を執筆し、大正4年9月10日付で英語授業の他、美術史担任となり、大正6年6月30日東京美術学校助教授に任ぜられ、大正10年10月11日、美術史家黒田鵬心に勧められ東京市本郷区画報社から『芸術家と芸術運動』を出版した。

大正14年1月6日、西洋美術史研究のため2年間イギリス、フランス、イタリアへ留学を命ぜられる。同年、フランス商工省より巴里装飾美術博覧会日本部審査委員を委嘱され、昭和2年9月14日、在外研究を終え帰朝。昭和3年4月より再び東京美術学校で西洋絵画史と英語授業を担任し、昭和4年3月28日東京美術学校教授に任ぜられた。昭和10年には工藝科予科主任を務めた。

執筆活動が最も充実したのは、帰朝から来沢までの期間で例えば昭和3年、平凡社から我が国最初の『世界美術全集』が刊行されたとき、その第一巻の巻頭論文は森田亀之助の「先史時代総論」であった。なお、この全集には第二巻に「希臘絵画論」。第三十巻に「ラファエル前派から1880年迄の欧州絵画」。別巻第四巻に「西洋寫本挿絵概論」の論文が載っており、これらの他にも多くの出版物に美術史の論文や美術関係の評論を発表している。なお同履歴書によれば、東京美術学校の他、大正2年より私立高輪中学校図案科、大正8年より東京女子高等師範学校(西洋美術史）で夫々4年間嘱託教員を務め、昭和10年9月1日より私立多摩帝國美術学校教授を兼任（西洋美術史、藝術機構論、藝術技法材料一般、英語等)、昭和11年東京府立第一高等女学校（美学）昭和18年浦和高等学校(西洋美術史)、昭和19年沢藤電機株式会社青年工員教育顧問を嘱託勤務していた。

昭和21年、金沢美術工芸専門学校長として着任してからは、学校の仕事以外にも石川県文化審議会委員、都市計画石川地方委員、金沢市文化賞選考委員、石川県観光審議会委員等々公私とも多忙を極め、論文や評論の執筆活動は停止せざるをえなくなった。その点は残念であるが、美術界での森田亀之助の知名度は高く、彼が在任中に日本画の野田九浦、漆工の吉田源十郎、日本・東洋美術史の秋山光夫、田中一松、西洋美術史の板垣鷹穂、森口多里、大隅為三、美学の青柳正広、塗料学の大島重義などの諸先生が集中講義で毎年来学され、その他にも日本画の福田平八郎、洋画の和田三造、日本美術史の黒田鵬心、鎌倉芳太郎、藤懸静也など多くの著名な美術家や美術史家が来学し講演や特別講義などを行った。来学は実現しなかったが、日本美術史の集中講義を会津八一に依頼したことがある。早稲田大学教授安藤更生博士の話によれば、会津の「書」を最初に世に紹介したのは森田亀之助であり、そのことに関して会津は終生感謝していたそうである。草創期の本校に第一線で活躍する人々を次々と迎え得たのは森田の功績といえよう。

森田亀之助は学校の図書館（当時は図書課）の充実には特に留意し、図書の選定は校長（学長）が行い、収集方針としてはまず中央アジア関係の図書を重点的に購入した。

また金沢美術工芸専門学校に着任の折、新設の学校では参考品は無いであろうと、東京から紅型の型紙102枚を持参した。これは鎌倉芳太郎が沖縄で収集し、啓明会が保管していたもので、昭和32年5月1日、啓明会から本学に寄贈された。

昭和25年4月1日、金沢美術工芸短期大学長に任命され、金沢美術工芸専門学校長を兼務することになった。短大時代で特筆すべき事項としては、漆工科に洋塗関係の講義の開講と、四年制大学に昇格準備のため学内を整備充実したことがあげられる。

洋塗の講義は漆工科の太田誠二の進言で実現した。その間の経緯もわかるので、次に太田誠二の略伝を紹介しておきたい。

「太田誠二」は明治22年富山県に生まれ、大正３年東京美術学校漆工科本科を卒業後、富山県工業試験場技手、石川県工業技手、石川県立工業学校教諭を経て、昭和10年７月石川県立工業学校長、同14年静岡県静岡工業試験場長、静岡県島田工業試験場長を歴任。同21年９月30日金沢美術工芸専門学校講師を委嘱され、同22年６月同校の専任講師となり、同25年４月金沢美術工芸短期大学講師、同30年４月金沢美術工芸大学講師、同40年３月定年退職した。その間、大正５年第11回文部省展覧会に初入選後、文展、帝展に度々入選している。漆工が本職であるが、日本画でも入選している。大正15年５月商工省より欧米各国へ出張を命ぜられ、また同博覧会に出品し名誉賞を受賞した。

昭和６年10月農商務省輸出工芸博覧会に入選。以後、毎回出品し入選数十回に及ぶ。その間、数回受賞し、審査員も務める。

太田誠二は精緻な蒔絵で知られ、また変り塗にも詳しかったが、彼の話では「大正15年欧米へ留学し、これからの工芸家は技術だけではなく、頭の方の勉強が重要であることをいろいろと考えさせられた。それで漆工科の学生にも洋塗の講義をと思い、塗料学会へ講師の紹介をお願いしたら、大島重義博士が来学されることになった。」ということである。

金沢美術工芸大学が保管する大島重義の履歴書には、「昭和25年４月１日、石川県金沢市公立学校教員に任命する。金沢美術工芸短期大学講師に補する。兼ねて金沢美術工芸専門学校講師に補する。昭和30年４月１日金沢美術工芸大学講師を嘱託する。昭和44年３月31日退職」となっている。そして、大島博士から直接聞いた話では「日本の大学で洋塗の講義を最初に開講したのは金沢美大である。」ということである。

短期大学時代で最も重要な事項は、四年制大学へ昇格のための準備に関する事項であるが、その詳細は『金沢美術工芸大学50年史』に述べられているのでここでは割愛するが、その項目を記せば、第一点には工芸科を廃止し産業美術学科とするため教員のメンバーを刷新する。これは金沢美大の50年の歴史の中で最も重大で難しい改革であり、森田学長であったからこそ出来たことと思われる。第二点は図書館の改善で、これまでは大まかな図書の分類であったのを「日本十進分類表」による分類に切り替え、全蔵書を分類整理したことと、各芸術系大学の図書館規定を参考にして、本学の図書館規定を制定したことがあげられる。

昭和29年９月27日、金沢美術工芸短期大学を母体とする金沢美術工芸大学（四年制）の設立方を申請し、同30年２月１日金沢美術工芸大学（美術学科＝絵画専攻、彫刻専攻。産業美術学科）の設立が認可され、森田亀之助が昭和30年４月１日、金沢美術工芸大学長に任ぜられ、同39年３月31日退職した。この間で特筆すべき事項の一つは『金沢美術工芸大学学報』の創刊であろう。この雑誌は美術系大学の研究発表誌としては戦後最も早いものの一つと言われており、第１号の編集印刷等は宮川靖五郎事務局長が陣頭指揮をとり、昭和31年12月31日に発刊された。巻頭に次のような創刊のことばが載っている。

金沢美術工芸大学学報創刊に際して

学長　森田亀之助

本学内で授業、研究に従事している人々の新らしい研究或いはその造詣の一端でもを発表する、この種機関紙を刊行したいとは、予てからの念願でありましたが、今度、本学が四年制大学となつた第一年度に於て、しかも、創立以来十周年記念日を前にして、愈々その実現に着手するに至つたのは、まことに欣ばしいことであります。

何に致せ、本学としては初めての試みであるから、出来上つて観たら、色々不備な点も見出されはせぬかと思いますが、勿論、それ等は今後逐次改善して行く積りであります。

美術大学は、其の性質上、教授陣内に技術家が多いのは当然です。学科関係の人々の論文の如きは、大体活字で印刷できるものであるから、編輯資材と

して問題はないが、技術家の研究成果は、活字では現はせない作品が即ちそれであります。これ等を相当な躰裁で誌上に収めることは、製版などで費用も嵩みますし、又、それ等芸術作品は殆んどが、展覧会等で公にされていますので、創刊号準備多忙の際、割愛させてもらつたのです。然し、これは矢張り学内研究の一部を代表するものであるから、全部でない迄も、その特殊なものだけでも、複製登載すべきものでしようし、亦その制作の径路などに、語るべきものがあつて、仝時にそれをも掲載するなどできれば、之も有意義であると考えられますので、将来は、できるだけ、さように致したいものです。

兎も角、学内研究施設の整備を図ると共に、その成果発表の方へも精々力を尽したい考えでおります。

また、第1号の目次は次の通りである。

金沢美術工芸大学学報
第1号　目次

森田亀之助：金沢美術工芸大学学報創刊に際して
板垣鷹穂：個性的存在の研究
—特に芸術創造を主体とする個性について—　……1
秋山光夫：羅什三蔵絵伝攷　……23
大隅為三：二，三の文様について……29
森　嘉　紀：色と音の相関についての基礎的研究
—調査序報—　……31
木村弘道：陶工鶯谷庄平　……42
宮下史郎：ホモゲンホルツのシリコン処理について　……48
徳村佑市：DOM JUAN ET LES RÈGLES
……53
平野謙一：戦後文学論　……58

ところで、森田亀之助の履歴書によれば、昭和40年4月29日、叙勲二等瑞宝章、昭和41年2月21日、死去とあり、金沢美術工芸大学の草創期は終った。

〔日本画〕

「畠山錦成」は、明治30年9月5日、金沢市に生まれ、大正5年4月東京美術学校に入学。在学中の大正8年、第12回文部省美術展覧会に「瑞蓮」を出品し入選。同10年4月、東京美術学校日本画科を卒業。第2回帝展に「空」、第4回帝展に「花野」、第6回帝展に「白芙蓉」、第8回帝展に「雪ノ駒ヶ岳」が入選し、第9回帝展「秋」、第10回帝展「向日葵」が連続して特選を受賞した。以後、第11回帝展に「蘇鉄」、第12回帝展に「巌角小薫」、第13回帝展に「孔雀」、第14回帝展に「凪」、第15回帝展に「金洞飛燕」を無鑑査出品す。昭和12年、新文展第1回展に「猫」を無鑑査出品し、以後、第3回文展に「葉煙草」、第4回文展「松」、第5回文展に「栗」、第6回文展に「葡萄」を無鑑査出品。同19年11月20日文部省戦時特別美術展覧会に「菊」を無鑑査出品。同21年3月5日金沢美術（工芸）専門学校設立委員（非常勤嘱託）、同年9月30日金沢美術工芸専門学校講師を委嘱。同23年2月25日金沢美術工芸専門学校教授。同24年第5回日本美術展覧会に「桐」を招待出品。同25年4月1日金沢美術工芸短期大学教授、兼ねて金沢美術工芸専門学校教授となり、同30年願により本職を免ぜられ上京する。同年の第11回日展に「向日葵」を無鑑査出品。以後、第12回日展に「樹立」、第13回日展に「梨」、昭和33年第1回新日展に「鵜」を無鑑査出品。第3回新日展の審査員となり「像」を出品。同35年三越本店にて個展を開く。同36年第4回新日展に「香果」を出品。日展会員に推挙される。同37年第5回新日展に「晃鱗」を無鑑査出品。同年三越本店にて個展を開く。同38年第6回新日展に「浅間山」、同39年第7回新日展に「杜」を無鑑査出品。同年三越本店にて個展を開く。第8回新日展に「カンナ」、第9回新日展に「立秋」、第10回新日展に「群」、第11回新日展に「苗」、昭和45年第2回改組日展に「鶏頭花」、第3回改組日展に「潮」、第4回改組日展に「潮風」、第5回改組日展「松」、第6回改組日展に「山羊」、第7回改組日展に「松ヶ枝」、第8回改組日展に「谿泉」を無鑑査出品。昭和51年10月14日、金沢美術工芸大学名誉教授の称号を贈られ、

平成７年１月26日没。

彼の描くものはモチーフとしては山水や花鳥がほとんどで、人物を扱った作品は少ないが全く無いわけではなく、例えば昭和11年作の絹本着色「子猫」（目黒雅叙園蔵）は、題は「子猫」であるが、中振袖の正装した若くて美しい令嬢が、欄干に寄って子猫と戯れている姿を描いた作品である。爪先立って、片膝をついた不安定なポーズが、出掛ける前のほんの一時の情景を暗示している。

人物を右の方に寄せ、左の方に広い空間をとった構図と、衣裳の色と同系の色で調子を整えた画面は、すっきりとし近代的である。

彼の絵画は、斬新な構図と巧妙な色彩の調和で、垢ぬけした作品になっているものが多い。昭和３年第９回帝展で特選になった「秋」は、画面中央に大きく樹幹を描いた大胆な構図に、やや突飛な感があるが、色彩は美しく装飾的効果の豊かな作品である。翌年の第10回帝展に出品した「向日葵」も連続して特選になり世の注目を集めた。

彼の作風は写生を生かした堅実な写実にその特色が認められる。そして、彼の誠実な人柄と長年の絵画の世界での精進により、やがて自由な画境三昧の素直な衒いのない作品を多く描いた。

「野田九浦」は、明治12年12月22日、東京下谷上根岸に生まれた。名は道三、九浦と号した。同16年、一家をあげ北海道函館に転居。同22年頃、遊歴途上来函した南画家小西皆雲に就き、また北条玉洞経営の絵画専門学校に学んだ。小学校卒業後函館商業学校へ入学したが、明治27年３月25日中途退学。同年４月１日寺崎廣業に伴われて上京し、門下生として廣業の画塾に入り寄宿する。同29年４月１日東京美術学校選科に入学。大槻文彦に就き漢学を学ぶ。

明治30年４月１日、東京美術学校岡倉校長失脚騒動により、同校を退学。

同31年、白馬会研究所で洋画を学ぶと同時に、日本美術院研究生となり、日本画にも精進した。この頃正岡子規に就き俳句を習う。また渡欧の目的で仏国公使武官田島大佐に仏語を学び、さらに暁星学校佛語科に通うなど、仏語の勉強は９ヶ年に及んだ。

同32年、日本絵画協会共進会に「王昌齢」を出品。

同40年、第1回文展に「辻説法」を出品し２等賞を受賞、文部省買上になり、現在東京国立近代美術館蔵になっている。絹本着色の200号を超える大作である。これは、慶長５年、日蓮上人が生まれ故郷の安房の清澄山に登って、旭日を拝み、妙法蓮華経の題目をとなえた。やがて日蓮は追われて鎌倉に行き、毎日街に出て通行人に法華経の功徳を説いた。日蓮はそのとき32歳。壮気鋭く迫害にも屈せず熱心に布教する有様を描いた大作である。

九浦は寺崎廣業に学んだが、廣業は、門下生に白馬会研究所でデッサンを学ばせ、師弟ともに大いに新風をうちだすところがあった。この作品も群衆への光線の照射や、各人物の姿態や動きなどに洋風の表現が感じられる。日蓮をとりまく群衆の視線や恰好の妙はすばらしいが、欲をいえば、いま一つ群衆間に連帯感がなく、一人一人が孤立しているきらいがある。しかし、群衆それぞれの説法の受け取り方が表情にあらわれており、第１回文展の圧巻の作であることは確かである。

「辻説法」で評判を受けたこの年、滝精一の推挙で大阪朝日新聞社に入社した。夏目漱石の小説「坑夫」の挿絵を描くためであった。九浦は未知の大阪へ行き、大川端の宇和島侯蔵屋敷跡の天井の低い薄暗い編集室で仕事をしたそうで、大阪画壇のためにも大いにつくした。さらに渡辺霞亭の小説の挿絵も受け持ったが、最も活躍したのは明治天皇崩御のときであった。当時はまだ写真が発達していなかったので、新聞の挿図は画家のスケッチが主であった。九浦は大阪、桃山、京都をスケッチして回り、遂には、挿絵だけの号外が出ることになったという。九浦は、それを最後に朝日新聞社を辞め、本格的に絵に専念した。

明治43年、第10回巽画会に審査員として「天平美人」を出品、同44年、第11回巽画会審査員。第５回文展に出品した「仏教東に来る」が褒状を受ける。同45年、第12回巽画会審査員。大阪美術展を興す。大正２年、第13回巽画会審査員。第７回文展で「天

草四郎」が褒状を受け、続いて同３年、第８回文展で「梅妃楊貴妃」が、同４年、第９回文展で「発願」が連続して褒状を受けた。

大正５年、大阪より帰京し、同６年、第11回文展で「妙見詣」（六曲一双）が特選を受賞した。同7年、第12回文展に「霊山縁起」（六曲一双）を出品。帝展無鑑査となる。同８年、第１回帝展に「網場」（六曲一双）を、同11年、第４回帝展に「高原晴日」（六曲一双）を出品する。同13年、第５回帝展に「金沙灘頭之美女」を出品。同年帝展委員となり、同14年、第６回帝展、昭和元年、第７回帝展、同２年、第８回帝展、同３年、第９回帝展、同４年第10回帝展の審査員をそれぞれ連続してつとめ、第８回帝展に「旅人」、第９回帝展に「諸人登嶽」、第10回帝展に「雪舟」、同７年第13回帝展に「潜伏切支丹」、同９年、第15回帝展に「宗祇法師」を出品した。昭和12年、第１回新文展の審査員をつとめ、「一休禅師」を出品。李王家買上げになる。同13年、第２回文展に「下宮跡」を出品。同14年、第３回文展、同16年、第４回文展の審査員をつとめ、第３回文展に「王道楽土」、第４回文展に「武人武蔵」を出品し、さらに同16年には煌土社展に「山荘における廣業先生」を出品した。同18年、第６回文展に「鍛刀」を出品。同21年４月10日、帝国芸術院会員に推薦される。

同22年３月31日、金沢美術工芸専門学校講師を委嘱される。第３回日展に「猿簑選者」を出品。同23年２月25日、金沢美術工芸専門学校教授に任ぜられる。

同24年、日展運営会常務理事となる（～29年）。同25年４月１日、金沢美術工芸短期大学教授に任ぜられ、兼ねて金沢美術工芸専門学校教授に補せられる。同26年、第７回日展に「獺祭書屋」、同28年、第９回日展に「修道女」、同29年、第10回日展に「Ｋ氏愛猫」を出品。

同30年３月31日、願により、金沢美術工芸短期大学を退職。同年金沢美術工芸大学名誉教授の称号を贈られる。

同33年、社団法人日展顧問となり、第１回新日展に「晋其角」を出品。同34年、美術協会展に「俑」を出品。煌土社を再興。同35年、煌土社展に「藤三娘」を出品。同37年、第５回新日展「廣業先生」を出品。

同46年11月２日、老衰により死去。享年91。

野田九浦は、性格は誠実円満で主として歴史人物画を得意とし、日本画の伝統的な線描に独自の味わいを持っており、その点が特に高く評価されていた。また、創画会の中心人物として活躍し、東京芸術大学教授もつとめた吉岡賢二をはじめ、多くの弟子を育てた功績は大きい。なお、野田九浦は画家として知られているが、学者としての面も見逃せない。かつて大隅為三も「野田九浦は絵描きであるが、学者としても立派な人物である。」と評していたが、特に狩野探幽の研究は有名である。

『狩野探幽』・新古画粋第四編・新古画粋社・大正８年

『狩野探幽』・泰東書院・昭和５年

『探幽』・東洋文庫十・アトリエ社・昭和14年

「探幽と守景」・美術公論一ノ三

などの著書や論文があり、野田九浦の学者としての一面を伺うことができる。

〔油画〕

「宮本三郎」は、明治38年５月23日、石川県能美郡御幸村で生まれた。大正11年、川端画学校洋画部に入学。富永勝重、藤島武二の指導を受ける。

大正12年、光風会第10回展に初入選す。第４回中央美術展に「ポーズする男」が入選。９月、京都に移り、関西美術院で黒田重太郎の指導を受ける。

昭和２年、第14回二科会展に「花」が初入選する。以後、二科会展には渡欧の昭和14年を除き、昭和19年まで毎年出品する。昭和３年、第15回二科会展に「窓ぎわの裸婦」、「食卓の女」。昭和４年、第16回二科会展に「女の像」。昭和５年、第17回二科会展に「酒を呑む男」、「乗客」が入選。

昭和６年、この頃、安井曽太郎に師事する。第18回二科会展に「はだか」、「休憩室」、「粧ふ女」。昭和７年、第19回二科会展に「花と女」、「観客席」、「待合室」が入選。二科会会友に推挙される。昭和８年、

第20回二科会展に「露店商人」、「乗客」、「群衆」。昭和９年、第21回二科会展に「裸婦」、「家族席」、「海女」を出品。12月、銀座画廊で最初の個展を開き、「脱衣」、「家族席」、「枯れ草と海」、「ざくろ」などの油絵と裸婦素描10点を発表する。昭和10年、第22回二科会展に「婦女三容」、「夏山」、「赤松と渓流」、「青い敷物」、「赤いクッション」を出品し、会友の出品に与えられる推薦賞を受賞。

昭和11年、春季二科展に「裸婦」を出品。第23回二科会展に「ゆかたの女」、「野に憩ふ」を出品。二科会展会員に推挙される。昭和12年、第２回春季二科展に「金魚鉢と裸婦」、「室内裸婦」などを出品。第24回二科会展に「牛を牽く女」、「蚊帳」、「裸婦」を出品。昭和13年、栗原信、田村孝之助と朱玄会を結成し、第１回展を１月、日本橋三越本店で開催し、「静かなる海」、「静物」、「花と女」、「江の浦」など14点を出品。同展には以後昭和17年まで出品する。同13年９月28日、神戸出港の≪箱根丸≫で絵画研究のため渡欧し、昭和14年、１月から３月いっぱいかけてレオナルド・ダ・ヴィンチの「受胎告知」やレンブラントの「聖家族」を模写し、また各地の美術館や寺院を見学していたところ、第二次世界大戦が勃発したため、日本大使館の勧めにより、同年12月４日帰国した。

同15年、第27回二科会展に滞欧中の作品９点を特別陳列した。９月、軍の命令により北支方面に従軍する。滞在３ヵ月。

同16年、第２回聖戦美術展（陸軍美術展）に献納画「南宛攻略図」を出品。第28回二科会展に「看護婦」、「待機」を出品。二科会評議員となる。昭和17年、春季二科展に「雨後の箱根」を出品。同４月、陸軍省から派遣されて南方戦線に従軍し取材する。陸軍からは「香港ニコルソン附近の激戦図」を、海軍からは「セレベスの落下傘部隊の激戦図」を命ぜられる。さらに、シンガポールに待機中、同方面軍司令部から「山下・パーシバル両司令官の会見図」の制作を新たに命ぜられる。第29回二科会展に「マレイの少女」、「インドの青年」「ユーラシアン」と風景画等を出品。朝日新聞社主催・大東亜戦争美術展に「山下・パーシバル両司令官会見図」、「香港ニコルソン附近の激戦」が特別陳列される。昭和18年、朝日新聞社から献上画「大本営御親臨の大元帥陛下」の制作を委嘱される。５月３日、前年発表した「山下・パーシバル両司令官会見図」に対し第２回（昭和17年度）帝国芸術院賞が授与された。第６回文展に「マライの少女」を出品。第２回大東亜戦争美術展に「大本営御親臨の大元帥陛下」および「海軍落下傘部隊のメナド奇襲」を発表。なお同展に「皇后陛下陸軍病院行啓」も出品。

昭和19年、１月25日、作戦記録画「海軍落下傘部隊メナド奇襲」に対して第15回（昭和18年度）朝日新聞文化賞を贈られる。３月、陸軍美術展に「本間、ウエンライト会見図」を出品。朝日新聞社から献上画「大東亜会議図」を依嘱される。８月、郷里の石川県小松市に疎開、軍の献納画「レイテ沖海戦」と「大東亜会議図」の制作にかかる。第30回二科会展にポルトガル大使から依頼された「少年隊」を出品。二科会はこの30回展を最後に解散。11月、文部省戦時特別美術展に「シンガポール陥落」が特別出品される。昭和20年、聖戦美術展に献納画「レイテ沖海戦」を出品。８月、「大東亜会議図」未完成のうちに終戦。

以上が画家宮本三郎の画業の前半の足跡を年譜にまとめたものである。

彼が画家として活躍したのは大正末期から昭和49年までであり、画家として最も重要な時期が支那事変、太平洋戦争の時代であった。彼の画業を考察するとき戦争画を抜きにすることはできない。

昭和20年８月15日、日本の敗戦を契機に宮本三郎の画家としての後半の人生が始まる。昭和21年、９月30日金沢美術工芸専門学校講師を委嘱。同月、米駐留軍宿舎の金沢・白雲楼の食堂の壁画「日本の四季」が完成した。壁画に必要な適度な装飾性を加味した戦後の彼の画業の出発点を飾る労作である。同22年４月28日、同志と第二紀会（のち、二紀会と改称）を創立する。５月、新憲法実施並びに東京都美術館20周年記念現代美術展覧会に「朝の湖」を出品。９月、第１回第二紀会展に「肖像」、「朝」、「裸婦試

作」、「清流」、「窓」を出品。同23年2月25日、金沢美術工芸専門学校教授に任ぜられる。5月、疎開先の金沢から東京に帰る。10月21日、第1回金沢市文化賞を受賞。10月、第2回第二紀会展に「裸婦(窓)」、「裸婦(赤)」、「裸婦(黄)」、「裸婦(黒)」を出品する。同24年5月、毎日新聞社主催第三回美術団体連合展に「裸婦A」、「裸婦B」を出品。この黒を主色とした作風は、この秋の第二紀会展まで続き、次に褐色に変わって行く。10月、第3回二紀会展に「金魚と裸婦」、「座せる裸婦」などを出品する。

同25年3月、朝日新聞社主催・第1回選抜秀作美術展に「脱衣裸婦」を出品する。5月1日、金沢美術工芸大学教授を辞任。同月の第4回美術団体連合展に「ひらめ」、「裸婦」、「卓上静物」を出品する。同年10月、第4回第二紀会展に「裸婦A」、「裸婦B」、「裸婦C」、「かれい」を出品する。

同26年1月、第2回選抜秀作美術展に「裸婦B」を出品。5月、第5回美術団体連合展に「黒衣」、「鍋の静物」、「籠の静物」を出品。10月、第1回サンパウロビエンナーレ展に「えび」を出品。同月、第5回二紀会展に「H女」、「静物(A)」、「静物(B)」、「静物(C)」、「裸婦」、「ロジーナに扮する大谷洌子氏」を出品。同27年1月、第3回選抜秀作美術展に「鍋の静物」を出品。毎日新聞社主催・第1回日本国際美術展に「演奏者」を出品。5月31日、空路渡欧し、10月、ピッツバーグ国際美術展に「静物B」を出品。同28年3月1日、帰国する。この旅行の思い出話の中で「私ども画家が向こうへ行くとその仕事に興味を持って歓迎されるが、ある画家のところで私がパレットをひらいて描きはじめると、ビックリして“お前の国は歌麿や北斎がいたのに、それを捨て、われわれの真似をどうしてするのか”と非常に失望したような顔をする。……。」(『宮本三郎素描集』、毎日新聞社、昭和53年)と言っており、我々には考えさせられる意見である。5月、第2回日本国際美術展に「聖者の門」を出品。10月、第7回二紀会展に滞欧作「シャルトルにて」、「モンマルトルの家」などを特別陳列す。同29年1月、第5回選抜秀作美術展に「モレーの道」を、5月、毎日新聞社主催・第1回現代日本美術展に「裸婦」、「室内の裸婦」を出品。10月、第8回二紀会展に「裸婦二重像」、「画室の裸婦」、「裸婦群像」を出品。同年エジプト国際展に「静物」を出品し褒賞を受ける。

昭和30年1月、第6回選抜秀作美術展に「裸婦二重像」を出品。5月、第3回日本国際美術展に「水瓶を持つ裸婦」、「箱根」を出品。10月、第9回二紀会展に「人間群像」と題する200号の野心作を出品する。この絵は特定のテーマから取材した情景を描いたものではなく、色彩を抑えた微妙な褐色調で統一し、16、7人の裸婦が所せましと大きな塊となって画面いっぱいに展開している。しかし人体そのものの実感や実在感は稀薄で、それより人体はリズムの動的要素として組み合わされており、野心作にふさわしく、光の配分の妙が劇的効果をもりあげている。昭和31年1月、第7回選抜秀作美術展に「箱根」を出品。5月、第2回現代日本美術展に「演奏者」を出品する。10月、第10回二紀会展に「家族」、「箱根」を出品。11月、東京・大丸で宮本三郎新作展を開催し、22点を出品する。昭和32年1月、第8回選抜秀作美術展に「箱根」を出品。5月、第4回日本国際美術展に「裸婦」を出品。10月、第11回二紀会展に「農夫」、「裸婦」、「薪を運ぶ人」を出品。昭和33年1月、第9回選抜秀作美術展に「薪を運ぶ人」を出品。4月、日本美術家連盟の初代理事長となる。5月、第3回現代日本美術展に「乳牛」を出品。10月、第12回二紀会展に「山羊」、「阿修羅」などを出品。12月、銀座・兜屋画廊で個展を開き、「乳牛」、「魚」など23点を発表する。同34年1月、第10回選抜秀作美術展に「乳牛」を出品し、5月、第5回日本国際美術展に「百済観音」を出品。同月、銀座・松屋で(朝日新聞社主催・スケッチ展シリーズ第26輯)宮本三郎素描展が開催され、「阿修羅」以下主として奈良に取材したパステル画と旧作を含む60余点を出品する。10月、第13回二紀会展に流水シリーズ4点を出品。

昭和35年4月、日本美術連盟理事長を辞任する。5月、第4回現代日本美術展に「女優の像」、「花」を出品。10月、第14回二紀会展に「水」、「紅衣」、「白衣」の3点を出品。12月、兜屋画廊で近作油絵個展

を開き、「ほほ杖をつく女」、「横向」など18点を発表する。同36年５月、第６回日本国際美術展に「婦人像」を出品。彼は、このころの自分の人物画について「私の描く人物画の場合、大体着物から出ている顔や手にしても、そのものズバリのリアルでなく、筆触というか、タッチのもってゆき方で、ややリアルな感じを出す。一種の抽象ともいえるものである。従って制作に当たっては、バックを主にして、それが決まってから、ものを描いたり、画面上の物質面をいくつかに分解して、その色と物質の対比を考えたうえで仕上げてゆくわけである。」(『宮本三郎素描集』毎日新聞社）と言っている。彼の作品を理解するのに示唆に富んだ言葉である。７月、日本橋三越本店画廊で油絵個展を開き、「横顔」、「青の背景」、「ばら」など女性像と花を主とした20点余を発表する。10月、第15回二紀会展に「黒い髪」、「立っている女」、「黄衣」の３点を出品。同37年５月、第５回現代日本美術展に「バレリーナ」、「熱帯葦」を出品。10月、第16回二紀会展に「盛夏山湖」、「裸婦Ａ」、「裸婦Ｂ」を出品。同38年５月、第７回日本国際美術展に「歌手」を出品。同月、日本橋三越本店画廊で個展を開催し、近作21点を発表する。10月、第17回二紀会展に「妻と私と」、「黒鳥」、「浅草の踊り子」を出品。昭和39年３月、第５回国際具象美術展に「歌手」を出品。５月、第６回現代日本美術展に「歌い手」、「踊り子」を出品。同年７月、日動画廊における第１回太陽展に「池畔陽光」、「花」を出品。以後没年まで毎年同展に出品する。９月３日、東京オリンピック開催に際し、国立競技場のモザイク壁画「より速く」「より高く」が完成し除幕式が行われる。10月、第18回二紀会展に「箱根」、「若き妊婦」を出品。

昭和40年５月、第８回日本国際美術展に「歓喜」を出品。10月、第19回二紀会展に「不忍夜曲」、「化粧室の裸婦」を出品。12月、銀座・日動サロンで、宮本三郎展が開催され、旧作から最新作まで自選による55点を出品する。同41年１月15日、日本芸術院会員になる。５月、第７回現代日本美術展に「踊り子」を出品。10月、第20回二紀会展に「楽屋の人たち」、「夕暮れる日比谷」を出品。同42年４月、二紀会が社団法人となり、理事長に選出される。５月、第９回日本国際美術展に「裸婦を描く」を出品。６月、日本橋・三越本店画廊で個展「花と裸婦を描く」を開催し、花16点、裸婦10点を発表する。10月、第21回二紀会展に「黒い髪の裸婦」、「鏡の前」を出品。同43年５月、第８回現代日本美術展に「赤い敷物」、「蘭花」を出品。10月、第22回二紀会展に「花のカリアチード」、「更紗の前」を出品。三越本店における二紀会会員展に「芥子と海芋」他１点を出品。同44年６月、日本橋三越本店画廊で「花・裸婦・舞妓」の個展を開催し、「裸婦礼讃」、「舞妓静座」など40点を出品する。10月、第23回二紀会展に「浴女」、「裸女たちに捧ぐ」を出品。

昭和45年10月、第24回二紀会展に「レ・トロワ・グラース」、「浴泉」を出品。昭和46年６月、日本橋・三越本店画廊で個展「花と裸婦―女神たちの復活展」を開き、「渚」、「ヴィナスの化粧」、「オダリスク」など41点を出品す。７月１日、金沢美術工芸大学名誉教授となる。10月、第25回二紀会展に「二人」、「熱叢夢」を出品。同47年10月、第26回二紀会展に「女優」、「VENUS ANADYOMENE」（三部作の内其二）を出品。同48年10月、第27回二紀会展に「牧歌」（三部作其三）、「SALOME」（女シリーズ一）を出品。同49年８月23日、東京大学医学部附属病院に入院、10月、第28回二紀会展に「假眠」（絶筆）を出品。10月13日、没。享年69。

若いころの宮本三郎は、藤島武二や前田寛治、安井曽太郎などの教えを消化しながら、レアリストとしての才能を研ぎ、開花させていったが、やがて戦争の時代に捲き込まれ戦争記録画を遺した。この戦前から戦中への約十年間は、彼の昭和前期における一つの頂点を示しており、レアリストとしての真骨頂が発揮されている。

戦後は、昭和30年代からいよいよ円熟した画風の萌芽が見られるようになり、昭和40年代の10年間は、華やかな色彩が満ち溢れ、絢爛華麗な世界が展開し、写実と色彩の魔術師と言われた宮本芸術の完成期と言える。

彼は稀に見る鬼才と謳われ、その描破力にものを

言わせ多くの作品を描き、これからという時に没した。それらの作品には器用で“うまいなあ！”と感心させられる絵はあるが、しんみりと絵の中に引き込まれるような作品は少ない。それが、彼の個性というところであろう。

「小絲源太郎」は、明治20年７月13日、東京市下谷区に生まれた。生家は曾祖父の代から「揚出し」と呼ぶ料亭を営んでいた。父の小糸源四郎は松本楓湖に絵を学び、金工の海野勝珉、漆工の柴田是真、画家の渡辺省亭などと親交を結び、また森鷗外も時々立ち寄った。そのような家庭に育った小絲源太郎は明治37年、17歳のとき、両親に連れられて白馬会の展覧会を見に行き、そこに出品されていた藤島武二の「蝶」という作品に感動し洋画家になる決心をした。18歳の春、早速、藤島武二の指導する白馬会駒込研究所に入り素描を学んだ。

明治39年４月、東京美術学校西洋画科を受験したが不合格となり、金工科に入学することになった。小絲源太郎は『随筆集　冬の虹』（朝日新聞社・昭和23年）の中で「何でもかまわないから、美術学校へ入学してしまひさえすればいゝ。まごまごしてゐれば親代々の商賣を継がされて、揚出しのおやぢになってしまふ。それではとてもたまらない。入学さへ出来れば、徴兵猶豫がある。ただそのことだけで、折角両親はその気になつたところだ。油画だらうが日本画だらうが金工だらうが、何でもかまはない、まちがひなく入学出来るところへ入つてしまへばいゝ、あとはそれから先のことだ。

西洋画科はその頃から、すでに志望者が最も多数なので猛烈な競争試験があつたのだから、私のやうに、まだデッサンの素養もないものには、一寸困難だ、一二年は研究所で、うんと木炭畫を勉強してからでないといけない。油画かきになりたいのは、やまやまなのだが、何とも致しかたがない。たゞこの場合、入学することが先決問題なのだから、私は一番安全な金工科を志望することにした。」と云っている。しかし、入学後は、これまで以上に熱心に油絵を描き続けた。

明治43年５月、金工科在学中に第13回白馬会展に「静物」、「海辺」、「雪」を出品。同年10月、第４回文展に「魚河岸」が初入選。黒田清輝に認められ、西洋画科転科をすすめられた。明治44年３月、東京美術学校金工科を卒業し、４月、同校西洋画科に入学。10月、第５回文展に「屋根の都」が再び入選し、東京美術学校買上げになった。明治45年６月、第１回光風会展に「７月頃」が初入選。大正２年５月、初の個展「小糸源太郎洋画小品展」を日本橋本石町泰文社で開いた。10月、国民美術協会第１回西部展覧会に「静物」、「道頓堀」を出品。

大正３年、糖尿病のため東京美術学校を休学。そのまま中途退学となる。同年10月、第３回光風会展に「静物」を出品。第８回文展に「曇り日」、「雨」、「温泉場の夏」を出品し、「曇り日」が褒状を受ける。

大正４年10月、第９回文展に「雨のあと」、「湯野村」を出品し、「雨のあと」が再び褒状を受ける。その後、大正５年、第10回文展に四季の連作を出品し「春」と「秋」が入選した。大正６年、第５回光風会展に「初秋」、第11回文展に「きつつき」を出品。

大正７年10月、第12回文展に「三囲」を出品。会期中、ある誤解から自分で画面を傷つけ、大正14年まで展覧会出品をひかえる。

大正11年、『小糸源太郎画集・明治四十三年～大正十一年』を日本美術学院から出版した。この画集には大正８年以後の未発表の作品を主に掲載した。小絲源太郎の画業を初期・中期・後期と三期に分けるならば、このあたりまでが初期ということになり、印象派や後期印象派の影響の強い画風の時代である。彼は随筆集『風神雷神』の中で当時を回想して、「恰度その頃、雑誌白樺が、後期印象派の人たちの理論や作品を毎号掲載していた。鋭い気魄に満ちたゴッホや、セザンヌや、マチスの作品を見て、私たちは無闇に興奮させられたものである。私は特にゴッホに感激した。白樺の同人たちが、ロダンの作品を、二三日ずつお互いの家を持ち廻って居るという記事を見て心から羨しく思った。

私たちは、教室ではおとなしいデッサンを描いていたが、一たび校内を出ると、なかなか我慢が出来

なくなった。丸善や中西屋へ行って新着の洋書を漁るのが何よりの愉しみだった。」と云っている。

大正15年５月、第１回聖徳太子奉讃美術展覧会に「秋林暮色」と精緻な東洋的装飾美を見せた「薬草園」を出品し、画壇に復帰する。10月、第７回帝展に「遅日」を出品。ここから中期に入り、初期の作品と面目を一新し、克明な細密描写の写実的画風に転じた。この様式は昭和12年ころまで続いた。それ以降がコクのある独自の画風を築いた後期ということになる。

昭和２年10月、第８回帝展に「静寂」、同３年10月、第９回帝展に「書牆春闌」、同４年10月、第10回帝展に「秋」を出品。

昭和５年10月第11回帝展に「暮春閑情」を出品し特選を受賞。同６年光風会会員となり、同年10月第12回帝展に「獺祭図」を出品し再び特選を受賞、帝展無鑑査となる。以後、光風会展、帝展、文展、日展に出品し度々審査員を務める。戦時中は疎開せず、朴亭と号して句会によく出席し、制作の合間に俳句を詠む愉しさを味わっていた。昭和22年12月、多摩造形芸術専門学校（現、多摩美術大学）洋画科教授となり、同23年12月、同専門学校教授を退職。随筆集『冬の虹』を朝日新聞社から出版。

昭和25年４月１日、金沢美術工芸短期大学教授に任命される。同27年12月、随筆集『猿と話をする男』を筑摩書房から出版。同29年３月、昭和28年度第10回日本芸術院賞を受賞。同年同月31日、金沢美術工芸短期大学を退職する。同年11月、随筆集『風神雷神』を読賣新聞社から出版。

昭和34年５月、日本芸術院会員となり、昭和40年11月３日、文化勲章を授与される。昭和41年４月１日、金沢美術工芸大学名誉教授となる。この時を区切りにして、日頃たしなんできた俳諧や随筆から遠ざかり、絵一筋の生活を送ることになる。

昭和45年12月、三彩増刊（267）『小絲源太郎』を三彩社から出版。昭和49年10月、米寿を記念して『小絲源太郎画集1911～1974』を求龍堂から出版。昭和50年５月、『現代日本の美術７　岡田三郎助／小絲源太郎』を集英社から出版。

昭和51年５月、渋谷東急で小絲源太郎展運営委員会主催「小絲源太郎展」が催され、初期から昭和51年までの代表作83点を展示する。同年11月『アサヒグラフ別冊―小絲源太郎』を朝日新聞社から出版。

昭和53年２月６日、老衰のため大田区田園調布の自宅で死去。享年90歳。同年11月、第10回日展に絶筆「春光」を出品する。

小絲源太郎の作品は風景画と静物画の作品が多いが、そのほとんどはアトリエで完成されたもので、小絲源太郎自身が次のように云っている。

「僕は、とにかく、どこでも写生をしますね、ところが描いては描けないものがあるんです。なんて説明したらいいか、たとえば、そこで描いても、そこで色をつけるよりも、頭で記憶してくる色があるんですよ。数学者の頭の中に数字で計算できないようなヒントがあるんじやないかと思いますがね、それと同じように、現場で色をつけてしまったら、絵がだめになってしまうような色がありますね。形にも、それはあるけれど、色に特にそれがあると思います。ほら、自分でなくっちゃ見えない色ってものがあるでしょう。おのずから出てくる体臭って言うか、そういう色は現場で出てくるものじやなくって、アトリエに記憶して帰って描いた方がいいように僕は思いますね。しかし、一つの例を挙げると、私は宮島の五重塔を描いていますが、初め描いたとき、とても、いやな形になったので、暑いときに、また宮島に出掛けて描いたら、こんどは不思議な五重塔が出来たんです。やっぱり困った時は、自然にかえれということがよくわかります。僕は絵というものは、写実を基調にした構成だと思っているんですよ。」（「作家の発言」『みづゑ』731）

小絲源太郎の絵画の批評は聴く人たちを唸らすほど適格ですばらしいものであったが、この言葉は自分の絵画の性格をよく云いあらわしている。

〔彫刻〕

「松田尚之」は、金沢美術工芸大学が保管している履歴書によると、昭和26年９月１日、金沢美術工芸短期大学教授、昭和27年５月31日、願に依り本職を免ずる、昭和27年６月１日、金沢美術工芸短期大

学講師に補する、昭和29年４月、嘱託講師、昭和30年３月31日、願に依り本職を免ずる、昭和30年４月より昭和44年３月迄非常勤講師、とあり、この間に矩幸成と共に金沢美術工芸大学彫刻科および「北陸日彫会」の基礎を築いた。次に彼の略歴を紹介しよう。

明治31年９月４日、富山市越前町神通屋安兵衛の四男に生まれ、明治34年、３歳で松田家の養子になる。

大正６年、東京美術学校彫刻科塑造部本科に入学、朝倉文夫の教えを受ける。

大正10年、第３回帝展に「ポーズせる女」が初入選。大正11年、平和記念東京博覧会展に「習作」を出品し褒状を受賞。同年３月、東京美術学校彫刻科を卒業。引き続き研究科に入り、第４回帝展に「畔」を出品。同12年、武石弘三郎に師事し、同15年まで石彫を習う。同13年、第５回帝展に「心酔」を、同14年、第６回帝展に「女性」を出品。

昭和元年、第７回帝展に「姿」を出品し特選を受賞。同２年、第８回帝展に「若きひのかげ」を出品し再び特選を受賞する。

同４年、安藤照、堀江尚志らと塊人社を創立。毎年春に展覧会を開催、それは終戦まで続いた。第10回帝展に「女人像」を出品。同５年、京都帝国大学工学部建築学教室講師となり、京都に転居。第11回帝展に「狐影」を出品。

昭和６年、第12回帝展に「懐念」を出品し３度目の特選を受賞。帝展の推薦（無鑑査）となる。同７年、第13回帝展の審査員を務め「白光に浴す」を出品。同８年、第14回帝展に「裸婦」を出品。同９年、第15回帝展に「むすめ」を出品。同10年、第１回京都市展の審査員を務め、「清浦伯爵像」、「憩」を出品。

同11年、改組帝展に不出品の決意をし、塊人社彫塑展に出品する。同12年、第２回京都市展の審査員を務め、「乾先生像」を出品する。以後、昭和18年第８回展まで毎年同展の審査員を務め、出品する。同13年、第２回新文展に「母子」を出品。同14年、第３回新文展に「腰かけたる女」を出品。同17年、第５回新文展に「想」を出品。同18年、第６回新文展の審査員を務め、「娘時代」を出品。

同20年、第１回京展の審査員を務め、「少女」、「新生」を出品する。以後、度々同展の審査員を務め、出品する。

松田尚之の作風は４期ぐらいに分けられる。戦前の作品は、ポーズは概して穏やかで、なめらかな肌のもので、これが第1期の作風の特色といえる。そして戦後第２期がはじまる。次に戦後の主な作品を紹介しよう。

同22年、日展の招待となり、第３回日展に「座女」を出品。同24年、第５回日展の審査員をつとめ、「磐に立つ（第三番）」を出品。同25年、日展運営会の参事となり、第６回日展に「立女」を出品。

同26年、第７回日展の審査員を務め、「二人の女」を出品。同27年、京都学芸大学教授に就任。第８回日展に「二人の裸女」を出品。同28年、第９回日展の審査員を務め、「女性」を出品。同29年、第10回記念日展に「娘時代」を出品。同30年、第11回日展の審査員を務め、「年若き女」を出品。同31年、第12回日展に「巌に立つ」を出品。同32年、第13回日展に「女性」を出品。

昭和33年、第13回日展出品作「女性」ほかに対して、昭和32年度日本芸術院賞を受賞する。日展運営会が解散し、社団法人日展が発足するにあたり評議員に就任、第１回日展の審査員を務め、「足をあげている女」を出品。同34年、第２回日展に「作品60号」を出品。同35年、第3回日展に「婦人坐像」を出品。同36年、第４回日展の審査員をつとめ、「ポーズする娘」を出品。同37年、京都学芸大学教授を定年退官。第５回日展に「二人の女（追想）」を出品。

戦後からはじまり、このあたりまでを、第２期とすることができるように思われる。作風は、ポーズは第１期と同じく穏やかなものが多いが、作品の肌は起伏がありコクがある。そして第５回日展の出品作から、ポーズや構成が複雑な作品があらわれ、新しい展開がみられる。

同38年、第６回日展に「追懐（男女）」を出品。同39年、第７回日展に「から手」を出品。同40年、第

8回日展に「想」を出品。同41年、東京の三越で個展を開催。第9回日展に「向ふ」を出品。同42年、第10回日展の審査員を務め、「想」を出品。

同43年、日本芸術院会員に推挙される。日本彫塑会と、日展の常務理事に就任し、第11回日展に「羽衣」を出品。

同44年、日展改組にあたり常務理事に就任し、第1回日展の審査員をつとめ、「人魚」を出品。同45年、第2回日展に「波頭観音」を出品。

同46年、金沢美術工芸大学名誉教授の称号を授かり、京都市文化功労者に選ばれる。第1回日彫展の審査員をつとめ、「江口婦人（ミリヤムさん）」を出品。以後、毎年同展の審査員をつとめ、第13回、14回、15回、16回展では審査委員長をつとめる。日彫展は日展とともにこれから後、松田尚之の重要な作品発表の場となり、毎回出品する。

昭和46年の第3回日展の審査員をつとめ「歩」を出品。昭和47年、第4回日展に「ポーズする乙女」を出品。同48年、第5回日展に「エチュード」を出品。同49年、第6回日展の審査員をつとめ「髪」を出品。同50年、日展顧問となり、第7回日展に「粧い」を出品。同51年、第8回日展に「訶梨帝母」を出品。同52年、第9回日展に「飛天」を出品。

松田尚之の作風は、昭和37年第5回日展に出品した「二人の女（追想）」から、同44年改組第1回日展に出品した「人魚」を経て、同52年のこの第9回日展の「飛天」に至る期間の作品は、構成的要素を強く意識しながら制作した時期で、この期間を第3期とすることができるようである。そして、第4期は彫刻としての量感や立体感に加えて、情感やムードを重視した作風へと変わっていった。80歳になっても制作への情熱はますます盛んで、円熟した作品を次々に発表した。彼の第4期の制作活動を紹介すると、昭和53年、第10回日展に「布とあそぶ」、同54年、第11回日展に「手鏡を持つ娘」を出品。同55年9月、京都市美術館において、京都市主催による「松田尚之回顧展」が開催される（出品点数71点）。第12回日展に「かたらい」を出品。

同57年、日彫会理事長に就任し（60年まで）、第14回日展に「街角」を出品。同58年、第15回日展に「ポーズする人」を出品。同59年、第16回日展に「風神・雷神」を出品。同60年、第17回日展に「法戦を張る日蓮上人」を出品。同61年、第18回日展に「日高川」を出品。同62年、第19回日展の審査員をつとめ、「嬰児を掠奪する訶梨帝母」を出品。

同63年、第20回日展に「横断歩道を渡る女」を出品。平成元年、第21回日展に「似合うかしら？」を出品。平成2年、富山県民会館にて「松田尚之回顧展」が開催される（出品点数85点）。

平成7年3月29日没。享年97。

松田尚之は、帝展、文展、日展と官展を舞台に活躍した彫刻家であるが、この官展の作風は概して穏健正着の名のもとに皮相な表面的観照の写実様式をとるものが多いが、戦後になってようやく、せまい発想の框内であるが、多少でも表面的でない写実の追求が認められる作家があらわれている。松田尚之もその中の一人に数えられ、構成力のある仕事ぶりを示している。

「山本力吉」は、明治31年1月19日、石川県石川郡鶴来町坂尻町で生まれ、明治45年3月、鶴来町立高等小学校を卒業。木彫家として精進し、昭和24年5月10日、金沢美術工芸専門学校技術補佐員、同26年4月1日、講師となり、同40年3月31日に定年退職した。

彼は、講師以上には昇任せず、展覧会でも特に華々しい活動はしかった。むしろ慎ましい存在であった。しかし、その堅実な作風は近年識者の認めるところとなっている。以下、彼の経歴を金沢美術工芸大学が保管している履歴書や山本家の資料等により簡単に紹介しよう。

大正2年に木彫家三階松三（号千嶺）に弟子入りして木彫を学び、大正8年独立。そのころの仕事は主として欄間の制作であった。

昭和5年羽咋市滝谷妙成寺の書院の欄間の修理を依頼され、翌6年金沢市石引町城端別院金沢支院本堂の装飾彫刻を制作した。この作品は、そのころの代表作である。

昭和７年４月、日本美術院同人の彫刻家佐藤朝山に師事し、昭和11年２月、改組第１回帝展第三部に木彫の「仔牛」を初出品し入選した。彼はようやく彫刻家として、その第一歩を踏み出した。９月、第23回院展に「眠る仔牛」が入選した。

翌昭和12年９月には第24回二科展に木彫「闘牛」が入選した。これまでの可憐な感じの作品とは異なり、力動感の漲った、存在感のある作品である。同年にはさらに滋賀県琵琶湖の特別建造物竹生島神社の装飾彫刻の修理をした。

同13年９月、第25回院展に桜材の木彫「仔馬」が入選。日本美術院所属となり、以後、同展へ毎年出品する。同18年９月、第30回院展に木彫「仔らくだ」が入選。同19年５月、日本美術及び工芸統制協会第三部（彫刻）の査定会において甲種会員となり、木彫の「鳩」が政府買上げになる。なお、同年９月第１回軍事援護美術展覧会に木彫「馬」を招待出品す。

同20年２月、金沢市金石町大野湊神社の「神馬」の大作が完成する。同年10月、北國毎日新聞社主催の第１回現代美術展に木彫「和牛」を出品し美統賞を受賞。次に戦後の作品と主な事項を列挙しよう。

同21年３月、第１回日本美術展覧会に木彫「犬」が入選。同年９月、第31回院展に木彫「蛙」が入選。同22年９月、第32回院展に「仔馬」が入選。同23年５月、第33回院展に木彫「放牛」が入選し、日本美術院院友に推挙される。

同24年９月、第34回院展に木彫「裸婦」が入選。この作品について彫刻家の畝村直久が、９月４日の北國毎日新聞で「動物専門だった山本力吉氏が珍しく「裸婦」を院展に出品したが山本氏の木彫の技術はすぐれたもので、その持っている味は日本的なものだ」と評している。なお、当時木彫家山本力吉がどのように評価されていたのかを知ることができる資料がある。昭和25年１月12日の北国新聞に載った、彫刻家長谷川八十の論評がそれである。「昨年は石川県の彫刻界が大いにふるった年だったが、今でも嘱望される人はきわめて多い。そのなかでも山本君は三十数年の作歴を有し、秀れたノミの切れとともに古い形式を主とする木彫界に写実的作風をもって進んできたユニークな作家である。すでに一家をなした山本君を今なおホープとして私が語るのは、職人としての地位から脱皮、あくまで純粋作家としての創作意欲に燃えている点で、郷土では彼の右に出るものが少ないからだ。彼は主として牛馬、鳥類などの動物を専門としてきたが、昨今から人体にとりくみはじめた。日展に出品した裸婦はその試作品であるが、50歳をすぎながら新しい境地を勇敢に開拓してゆく気構えは尊重されるべきだと思う。

彼のすぐれた丸ぼり技術の写実的作風が人体というモチーフをとりいれてどのように展開されるか、山本君の活躍の前途には全国的にも多大の関心がよせられている。」と言っている。

同25年９月、第35回院展に木彫「男」が入選。同26年９月の第36回院展に木彫「微風」が入選。以後、院展を中心に活躍し、昭和27年第37回院展に石膏「裸婦座像」、同28年、第38回院展に木彫「童子」、同29年、第39回院展に石膏「女立像」がそれぞれ入選した。

同29年は彼の生涯にとって最も充実した年であった。院展の出品作の外に２軀の肖像彫刻が完成した。８月に完成した「暁烏敏の座像」と11月に完成した「枝権兵衛の立像」がそれである。

暁烏敏は真宗大谷派の僧侶で、松任市北安田町明達寺第18世住職である。全国を講演行脚し、また著書等生涯の出版数140数点。明治・大正・昭和の三代にわたって宗教や思想界に大きな功績を残した。暁烏のような傑物の像を制作することのできた彼は、幸運な彫刻家というべきであろう。

また「枝権兵衛の立像」はセメントの像である。枝権兵衛は文化６年に鶴来町に生まれ、明治12年、72歳で没するまで農民のために尽くし、今日も金沢平野七ヶ用水の父と敬慕されている人物である。この像も、力作の一つに数えられる。

昭和30年４月１日、金沢美術工芸大学講師に任ぜられた。同年の第40回院展には木彫「裸婦立像」が、また第10回美術院小品展に「裸婦」がそれぞれ入選した。以下、彼の「経歴書」によると、昭和31年第41回院展に乾漆「雉」、同32年第42回院展に石膏「ト

ルソ」、同33年第43回院展に乾漆「とぶ」が入選。9月22日に石川県鶴来町白山比咩神社に奉納される木彫「神馬」のノミ入れ式を行った。同34年第44回院展に木彫「女立像」が入選し、翌35年第45回院展に木彫「女立像」が入選。

同36年日本美術院彫塑部解散後、日本美術院所属となり、さらに日本彫塑会会員になる。そして同年の第4回日展に乾漆「望郷」が入選し、同37年第5回日展に乾漆「カンガル」が入選。同38年第6回日展に木彫「カンガル」入選。同39年第7回日展に乾漆「仔馬」が入選。

同40年10月「茶心観世音菩薩像」が完成。台座をいれて約2メートルの座像で、「和敬静寂」の心をあらわした特殊な観音像で、小松市の那谷寺の普門閣に納められた。

同41年第9回日展に木彫「放牛」が入選。金沢市中村神社の木彫「随神像」一対が完成。翌42年には同神社の木彫「狛犬」一対も完成。同年の第10回日展に木彫「老馬」が入選し、翌43年第11回日展に木彫「蒼空」が入選。

同44年5月25日、大作、白山比咩神社へ奉納の木彫「神馬」が完成。当時の新聞の切り抜きに彼は「“神馬奉納会”から制作を依頼されてから10年になります。実際の仕事にとりかかるまでの7年間、全国の有名な神馬を見て回ってきましたが、木彫の神馬では、この馬が一番大きいらしいですね」と言っており、直径が1.6メートル余の欅の大木を切り倒し、7年間乾かしてから制作したもので、胸と首、胴、腰と3部分を組み合わせた寄木造りで、鞍褥には白山の黒ユリ、雷鳥、タチバナ、シャクナゲ、アジサイ、セチアザミなどの動植物を彫り、白山の神さまの乗馬らしいよそおいがこらされている。

同45年、46年も目覚ましい活躍をしている。45年の改組第2回日展に木彫「白雉」が入選。第18回日彫展に木彫「闘牛」が入選し、努力賞を受賞。同年暮には金沢市神田神社から依頼された木彫「狛犬」一対が完成。高さ90センチ、横85センチの狛犬である。46年第19回日彫展に木彫「牛」を出品。金沢市高畠神社の木彫「狛犬」一対が完成。また「四高南下軍優勝の像」完成。これは、大正12年、全国高校剣道大会で四高が優勝したとき、紫紺の優勝旗を捧げ持つ当時の主将の雄姿を彫った高さ80センチの全身像で、彼の作品としては珍しい構成の作品といえる。

同47年11月3日、木彫を研鑽し幾多の秀作を制作し、金沢市の芸術文化の発展に尽くした功績を讃えて、第26回金沢市文化功労賞を受賞。同49年11月5日、鶴来町立明光小学校にブロンズの「枝権兵衛の立像」が設置される。

同51年8月には輪島市河井町の重蔵神社から依頼された木彫「狛犬」一対が完成した。高さ1メートル、楠の一木造りで4年がかりの力作で、この作品が彼の最後の大作であった。

同52年4月18日心不全で急死。享年79。

職人気質の彼は仕事にはきびしいが、生来おとなしい性格で、控えめで温厚な人であった。その人柄が作品にも反映しているように思われる。そして金沢美術工芸大学が開学30周年を迎えたとき、それを記念して、彼は第14回日展入選作「老馬」を大学に寄付したが、この作品をはじめとして、公共の施設や由緒のある多くの社寺に数々の大作を遺すことができた幸運な彫刻家であった。木彫家山本力吉の名は、後世に永くつたえられるであろう。

以上は、金沢美術工芸大学草創期の美術学科各専攻より教員各2名を選び、それぞれの略歴を紹介したものであるが、これらの人達の他にもここで割愛した何人かの特筆すべき人がある。特に美学・美術史をはじめとする一般教育等の人々については、全く触れることができなかったが、金沢美術工芸大学に関係した人達の伝記は、金沢美術工芸大学同窓会発行の雑誌『けやき』に掲載を予定している。

（本学名誉教授）